

非對象化の論理

田代秀徳

非對象化の論理とは主体的現實の論理である。主体的現實の在り方の基礎は實踐にある。觀想 (Kontemplation) に對して實踐が強調されることは意味なきことではない。人間的現實は主体的現實に存し、眞の人間の現實は實踐に於て初めて活きるからであり、觀想は多かれ少かれ實踐的現實からの派生性に依つて成立すると考へられるからである。然し實踐が觀想に依つて導かれるのか、觀想が實踐に依つて導かれるのかは、さう容易に解決し去ることの出來ぬ問題を含むであらうけれども、善を知らないのではない、知つてゐる其の善を行ふことが出來ないのである、⁽¹⁾「噫われ困苦人なる哉、この死の体より救はん者は誰ぞや」といふパウロの嘆きを俟つまでもなく、實踐とは意志の決斷であり、觀想も亦意志の決斷なしには可能でないといふ所から見ならば、觀想が實踐に依つて基礎づけられることは否定出來ない。其の基礎づけられ方が生物學的なるものか經濟・社會的なるものか道德的なるものか將又宗教的なるものなるかは今姑く問題外に措くとしても、觀想即ち知る或は觀るといふことの根底には意志的決斷が先づ働かなければならない。最高なる觀想としての神祕的直觀知、理解なき直觀 (visio sine comprehensione) の如きものが無ければ實踐的決斷も可能でないと做すも、觀想自体の實踐的性格を見失はない限り、觀想の根底には實踐ありと看なければ

ばならない。何事をも目標としない意志的決断は無い、意志的決断の存する所には必ず一種の観想が先行してゐるとの論法は主知主義の採る所であり、之に對して、観想無くとも純粹意志の獨立性を認めて實踐的價值をば純粹意志の活動に認めんとする主意主義の哲學（例へばカント）が之に對立する。主知主義か主意主義かの對立は古代と近世との思惟的差別でもあるが、又トーマス・アクイナスとドウンス・スコトゥスとの對立をも生み出したが、知るといふ現象をば一つの實踐と看る限り、汎實踐主義が考へられざるを得ない。従つて、眞に知るとは當該のことを實踐することであると做す王陽明の知行合一の立場に於て明かに知られる如く、知者行之始、行者知之成^(三)と考へねばならない。而して究極的な知に於ては、知が直ちに行である。即ち到^レ得^ル天理^ノ純然^ニ便是^ニ何思何慮^ヲ矣^(四)である。知るとは對象に對して態度をとることであり、知ること自体に既に實踐的性格が存するのであつて、知ることの決断的性格を認めねばならない。観想は第三者の立場から物を眺める態度であり、對象化して物を見るといふ論理を根底とする。即ち之は三人稱的關係に於て在る。之に對して實踐の本態は二人稱的性格に於て初めて其の純粹性に達するのであり、前者が我と彼或は彼と私の關係であると做せば、後者は我と汝或は汝と我なる關係を基本となす。汝とは對象化されたもの、對象化され得るものではない。對象化された汝は「彼」に過ぎない。我も亦對象化され得るものを根幹となす。かゝる我と汝との關係は主体と主体との關係であり、實に非對象化の論理を基本として初めて成立する領域である。

観想と實踐との生現實としての構造的差異は、観想を決断的實踐と解する限り、單に程度の差に留まり、兩者間には質的差異は認められないことになる。観想は第三者の立場に於て物を眺めることであるが、此の場合とても眺める主体の何等かの態度決定が敢行せられるのであり、之を離れて観想的現實は成立しない。故に観想と實踐、理論的態度と實踐的態度とは根本的差別を示さず、實踐的態度の究明が生現實究明の主題目とならねばならない。上述の如く

實踐的態度とは我と汝、或は汝と我との關係に於て成立し、觀想的態度は我と彼、或は彼と我なる關係に成立する。後者に於て「彼」とは對象化されたる物であり、前者に於て汝とは對象化する能はざる存在である。對象化されたる存在は我に對する關係に於て間接的である。即ち我に對して直接作用を及ぼさないものである。その際、對象の直接作用は我以外の他方へ向つてゐる。然し勿論間接的には我に作用を及ぼす。之に對して、對象化されざる存在としての汝は、之を第三者的立場から眺めることを許さないものであり、我に對して直接作用を行ふ存在である。對象からの作用を直接的ならしめるか間接的ならしめるかに依つて對象化的態度と非對象化的態度との差が生ずる。非對象化的なるものは其の根底を見透すことの出来ないことを特徴とする。然し對象化されるとは、そのものの内容が直ちに明晰判明に認識されることを必要としない。そのものの内容は未認識の段階にあらうとも、そのものが全体として客觀化されてゐる場合に於ても對象化されてゐるといふことを語り得る。對象化され得ない存在としての我と汝は、若しも之を觀想的態度に於て觀るならば「彼」に變じ、之は對象化されることが出来る。然し逆に觀想的態度に於て對象化され得るものとても、之に汝として對するときは對象化されることが出来なくなる。山川草木は、之を自然科學の對象と見るときは、之を對象化するのであり、客觀的尺度を用ゐて精密に分析することを許すけれども、之を汝として實踐的態度に於て之に接するときは、山川草木も亦限りなく深い背景から我に語りかけてくるであらう。

非對象化とは「彼」を「汝」に化することである。對象化とは「汝」を「彼」に化することである。實踐を基調となす生にあつては、非對象化的世界が根源的であると考へねばならない。非對象化的關係にあつては、無生物と雖も汝として我に對面し來る。萬物は神の無からの創造と信する宗教者にあつては、萬物は對象化されたる死物ではなく、神の光榮と恩寵とを具現する直接的汝としての意味を持つて來なければならぬ。我と汝或は汝と我との關係は、我と汝との生命が滲透し合ふことである。哲學的生命とは眞の主体を云ふのであり、對象化されざるものの根底

の働きに外ならない。"sich finden"とは主体としての相互的生命の流れが自己の地盤を汝に於て見出すの謂である。汝を自己の中に見出すとは單なる汝に就ての觀念を把握することではなく、全身心的相互滲透の結果に外ならない。二つの生命の相互關係に於て、一方が他方を受け容れぬ場合と全く受け容れる場合と受け容れつゝも之を反撥する場合とが形式的に區別出来るが、個々の生命が異なる限り、又生命的内實なるものが「公然の秘密」(ein offenes Geheimnis)である限り、現實の活きた人間の生命的態度としては肯定して然も否定し、否定して然も肯定する境位が基本形式と考へられねばならない。"sich finden"とは、かゝる肯定・否定關係に於ける否定が無限小なるときである。無限小は、無ではない。非對象化的態度は、他の主体に依つて對象化され得るが、非對象化の渦中に在る當事者にあつては對象化と非對象化とを同時に成立せしめることは出来ない。對象化的態度は平面化して見る態度であり、非對象化的態度にあつては立体化が行はれ、従つて内面や深さが問題となつてくる。平面的關係は外面的關係であるが、外面的關係にあつては表面的に觸れ合ひ掠め過ぎるに過ぎない間柄も、非對象化的關係に入ることにより内面的結着が起り、内面相互間の交通が可能となり、我と汝との根底は何れも其の深さを測ることの出来ない地盤に立つことになる。人間と人間との間柄としての非對象化的關係は主体と主体との關係である限り、相互主体の獨立性即ち自己肯定が存するが(宗教的態度以前に於て)、非對象化的態度の純粹なる徹底に於ては我は汝の中に融かし込まれ、其處では一つの汝としての主体が働くのみとなる。「既われ生るに非ず、キリスト我に在て生るなり」といふことになる。かゝる唯一の主体を通して人間に接し自然を見ることが宗教的態度に外ならない。宗教的態度は非對象化の純粹なる場合であり、此の態度にあつては萬物は一つの生命の働きと化する。道德も藝術も學問もかゝる宗教的態度を通して初めて具體的となり其の活力を得る。

非對象化的關係は主体と主体との關係であり、對象化的關係は主体と客体との關係である。非對象化的關係の條理

は先づ兩主体の信頼關係を基幹とする。信頼とは主体と主体とが非對象化的に互に内面を流入し合ふ關係である。かかる内面的交通としての信頼關係を基盤として敬と愛とが主体的關係の純粹現象として考へられる。敬は主体相互が最も遠ざかり離れることを主とするが、之と共に實は最も近付いて居る關係である。愛は主体相互の密接に依つて成るが、愛の純粹性は却つて相互に引離され匿される所に成立つ。自己否定が愛の必須條件なる所以は此處にある。信頼も亦その純粹性にあつては自己否定に至らねばならず、之は結局信仰に至つて自己否定を完成せしめられる。此の如く引離すと共に引付け、引付けると共に引離す所に主体と主体との生命的關係は可能となるのであり、此處に主体の情熱が湧く。ヘーゲルも云つた如く、^(六)世界に於て情熱無くしては如何なる偉大なる事業も爲されなかつた。情熱無き實踐は未だ實踐の純粹なるものではない。決斷は情熱であり、情熱は決斷である。決斷の純粹性は一瞬を永遠とし永遠を一瞬となす底のものでなければならぬ。情熱は意志的直観、行爲的直観の場である。情熱の世界は無限なる暗さを土台とする。無より出で、無に歸着する動きである。愛の情熱は限りなきやさしさと共に限りなき厳しさを含み、爰に愛としての生現實の眞實が存し、主体の眞活力は此處から湧く。武士の情とは此の謂である。然して信・敬・愛の客觀的形式が禮となる。

對象化的態度とは外向的眼を持つことであり、非對象化的態度とは此の外向的眼を翻轉して内向的ならしめることに依つて成立する。即ち自己の中に與へられたる汝を生命全体を以て體驗することが非對象化的態度である。對象化は外面から眺めるに對して、非對象化は内面からの生命的滲透を行ふときに成立する。我の中に於ける汝は私の生命と滲透し、汝の中に於ける我は汝の生命に依つて滲透される。此の際生命は内面の深さに眼を向けるが、我が汝を活かすことから、汝に依つて我が活かされることへの轉回が起るときに初めて非對象化の極限が認められる。非對象化作用を對象化するとき滑稽となり、對象化を非對象化するとき眞剣となる。滑稽と眞剣とは生現實の表裏であり、人

生の事實は悲喜劇である。懷疑的態度とは對象化に徹せんとして之を成し得ず、非對象化に徹せんとして之も成就し得ない態度である。非對象化的關係とは深さ・遠さに於て觸れ合ふことである。底知れぬ深さに於ての關係であり、匿されたるものの關係である。非對象化的關係にあつては對象化的世界の問題は地平内に入り來らない。

實踐は意志的決斷なりと解するならば、意志的決斷の生現實としての構造が此の際問題となる。決斷とは自己を棄てることである。自己を保つ所に純粹な決斷は存在しない。決斷の無い實踐は無いが、之を自覺するか否かに決斷の純粹性が認められねばならない。決斷は冒險である。成るか成らぬかは期し難い生現實の位相に外ならない。全か無かに於て、更に進んでこれでもなくあれでもない (weder-noch) 無の絶望的決斷に於て生現實の純粹性は發揮される。自己を棄てる所に起る生現實としての決斷は、結局全生命を自己ならぬものに献げることによつて現實化される。献げることが犠牲と解せず、恵みと解する所に生の極處がある。無への志向、無に支えられたる生現實に於て自己を棄てる、棄てる自己をも棄てる底の決斷に於て生じ來るものは何か。純粹徹底的なる決斷に於て成就せられる積極的結果は最早自己の所行ではないであらう。決斷的現實が自己ならぬものの力に依つて完成せられることは明かである。實踐的態度はかゝる決斷を其の根本性格となす。

我と汝との間柄に立つときの我に於て主体的現實が活きる。其の極限に於ては我は汝となり汝は我となる。實踐とは主体的現實に活きることに外ならない。此の際主体とは我と汝との間柄に立つ性格の存在者を云ふのであり、之は主我的或は利己的な存在者を意味するのではない。かゝる主体或は主体性の存在は何處にあるのか。此の問題に關して、社會的主体性と個人的主体性とが考へられる。然し此處で主体と云ふのは對象化されたる存在を云ふのではない。人生を客観化し其の構造は社會を土台となし、個人は此の土台の上に初めて存在する、故に個人的主体性は社會的主体性に依つて基礎づけられてゐるから、實踐は常に此の社會的主体性より行はれねばならないと論ずる立場があ

るが、かゝる對象化されたる社會學的構造を今問題としてゐるのではない。人間存在が本來社會的なものであることは、其の生體驗の原本的事實として我と汝なる意識事實の根源性から考へて明かである。然し社會的主体性が働く場は個人的主体性以外には無く、個人的主体性の現實的意義を度外視することは當らない。實存哲學が神と個人的實存との關係に拘泥し、其の媒介たる歴史的現實、社會的政治的現實を度外視することは單なる抽象的人間學に過ぎないといふ實存哲學に對する論駁は、決して全面的に誤れる批判ではないであらうけれども、個人的現實の哲學的意義を輕視する誤りは否定することが出来ない。個人を包攝する社會があるとしても其の社會に對する理解や實踐は個人の主觀を通してのみ可能なのであり、個人の關門を通らない人生の實踐は一つも無い。個人の關門を掠め過ぎるに過ぎない實踐は決して社會に於ける強い責任的實踐となることは出来ない。個人の内面に於ける主体的反省が怠られ、唯だ社會の罪、制度の弊を難詰する如きことは生現實に對する理解不足から由來する。個人的主体の現實に對する自覺不足から起る。自由と責任も個人個人の非對象化的主体性の現實から考へて初めて其の積極的意義を持ち得る。

観想的態度は對象化的態度であり、實踐的態度は非對象化的態度である。感覺や理性を通して與へられるあらゆる存在は對象化と非對象化の何れの態度を以てしても之に對し得るが、生現實としては實踐が基本である限り、對象化は非對象化を俟つて初めて可能であると云はねばならない。對象化的態度に於ける生現實の物の測り方は物理學的・心理學的であるが、非對象化的態度に於ては汝は象徴として對面し來る。ハイデッガーが範疇 (Kategorien) と實存範疇 (Existentialien) とを區別したことには意義がある。對象化的態度にあつては、對象をそれぞれの自己表現として解し、對象を平面化し透明化する。之に對して非對象化的態度にあつては汝は立体的であり奧行を持ち餘韻の深さ・微かさに依つて土台づけられる。それは非對象化が醇化されれば醇化される程益々汲めども盡きない泉となる。前者が何等かの意味に於て有限性・限定性の領域を通して對象を把握するに對して、後者は無限定の深淵に結末を徒らに

求めしめるのみである。対象化的世界に於ける時空的秩序が量的差から成るに對して、非対象化的世界に於けるそれは質的差から成る。

スピノーザが情熱を制禦する方法として明晰にして判明なる認識を以てしたことは周知の通りであるが、情熱こそ非対象化的態度を故郷となす生現實なのである。情熱は否定さるべきものかも知れない。スピノーザの云ふ如き認識不足のための情熱は須らく理性的認識に依つて消散せしめらるべきであらう。然し假令知見に依つて情熱を消散せしめ得るとしても、此の知見を懷くためには限りなき高次の情熱を必要とする。スピノーザの哲學は對象化的態度の哲學の典型的なるものであるが、之を成立せしめてゐる基礎は實踐的情熱に外ならない。生現實の情熱は如何ともなすことは出来ない。情熱は平板なる概念的世界に屬するものではあり得ない。それは暗い奥行の見え透かない匿されたものを抱く汝との對向に於て燃え立たしめられる生現實に外ならない。而もすべてが暗いのではなく明るさの中に暗さの焦点を持つて汝は對面し來る。情熱とは末梢的感官的なものの昂奮を此の際意味するのではなく、全身心的醗酵の原初態を意味する。情熱は求めて止まない。然も求め得られぬ所に其の生命を持つ。但だ全く求め得られぬ所に情熱は起らない。求めざるを得ない、而も求め得られるやうで求め得られない所に情熱の真相はある。斯く解すれば、情熱こそ實踐の基調となる。情熱の純粹性は愛に於て示される。愛は對象化的範疇ではない。それは非對象化的の論理である。我と汝とに於ける愛の關係とは兩者が密接融合するにも拘らず、それが兩者の自己否定に依つてのみ成就せられる關係である。即ち最も近いが同時にそれが最も遠いことに依つて支えられる關係である。最も近いと思ふときが最も遠いときであり、最も遠いと思ふときが最も近いときであり、最も短いときが最も長いときであり、最も大なるものが最も小なるものであり、救はれたと思ふときが墮落したときであり、始めが終りであり、終りが始めであり、永遠が一瞬であり、一瞬が永遠であることが非對象化的の論理でなければならない。見えたやうで見えない、さ

りどて全然見えないのでも見えるのでもなく、捉へたと思つたときは捉へてゐない、さればとて捉へ得ぬと思ふときも捉へてゐるとは限らない、左が右となり右が左となることが非対象化的現實の論理でなければならぬ。^(七)即心即佛は又同時に不是心、不是佛、不是物^{モノ}であらねばならぬ。^(八)

非対象化的世界は生現實として原本的に與へられてゐる。然し眞の非対象化的世界への自覺的通路は対象化的世界を通して與へられる。対象化の極限に現れる非対象化的なるものへの自覺は対象化的世界と非対象化的世界との通路となるであらう。此の如き極限は二重の意味に於て考へられる。一つは不可対象化的なるものへの遭遇であり、他は情熱に依る対象化作用より非対象化作用への轉換としてのそれである。対象化の極限を経過せぬ非対象化的自覺は素朴であり空疎抽象的である。哲學は絶対への人間的努力であると考へられる限り、哲學的精神の展開は非対象化的なるものを対象化し、更に之が非対象化される所に存する。神話的世界觀に依る實踐の規定に甘んずることが出来なくなつた人間の努力は、一に対象化的努力であると云ふことが出来る。対象化を通しての絶対への道を歩みつゝ、人間の精神史は流れてゐる。過去に於ける此の対象化への努力は種々なる結實を齎した。恩寵の光明を棄て、自然の光明に照らされてゐる近代人は、先づ自然を以て対象化の極限と考へた。然し自然必然性は多くの生現實に一應の解決を與へつゝも、然も之を以て生活の最後の段階が決して決定されたわけではない。対象化とは限定化である限り相対性を脱却出来ないから、一つの理論は必ず他の理論に對するのであり、絶対性を持つことは出来ない。學問は一切を対象化さんとの人間的努力であるが學問を通しての対象化は無限過程的なるものであり、而も非対象化的領域の嚴存は如何に學問が進展するも否定すべくもない。學問は有limits的相對の世界を脱することが出来ない。學問は汝を彼と化し更に此の彼を汝と化せざるを得ない所に其の極限がある。藝術の道は如何。藝術は學問に對して直觀的・具體的・個体的世界に没入する。學問が概念的・抽象的・普遍的の世界に進入するのは正に逆の方向をとる。藝術の特性は普遍的眞

理が具體的・個体的形式を與へられる所にある。學問の特性は個体的・具體的なるものを普遍的・概念的形式に翻する所にある。然して藝術に於ては創作的態度が其の中樞となる。之は非對象化的態度を主とし對象化的態度を従となすことに依つて成立する。藝術に於ても亦其の極限に際しては一切の「彼」は「汝」となる。然るに要するに學問も藝術も歴史の流れの中にある。歴史の流れとは時間の流れであり、時間の根本としての現在はずグステイヌも云ふ如く、決して捉へられぬ即ち對象化されぬ所のものである。時間の流れとは noch nicht なるものから出て何等の持續なき無的現在を経て nicht mehr に至るものである。過去とは現在に於ける過去即ち記憶としての現在であり、未來とは現在に於ける豫期内容に外ならない。然るときは此の記憶と豫期との境目たる而も記憶と豫期とが生きる現在とは noch nicht und nicht mehr との分界点として人間の測ることの出来ないものである。現在に捉へ得ない。捉へ得ない非對象化的なるものが歴史の根底に働く。歴史の根源は「汝」に歸する。

非對象化的態度の純粹性は宗教的態度に於て初めて見られる。學問の極限や藝術の極致が直ちに宗教であるのではない。汎神論や唯美主義の如きは未だ宗教とは云はれ得ない。眞でもない、善でもない、美でもない所に宗教の本質はあり、而もそれが同時に眞善美の高次なる光輝であることを示す所に宗教の本質はある。眞善美の綜合が直ちに聖なるものであるのではない。對象化的態度にあつては自己肯定が常に存する。絶對的自己否定を必須條件となす宗教的態度に於て初めて後悔と羞恥とは懺悔となる。最も私的・内潜的なるものが最も公的・外顯的となる宗教的態度に於て初めて非對象化的態度の純粹性が現れる。宗教にあつては、一切の自己を棄てる、棄てる自己をも棄てることが成就されねばならないからである。良心をも棄てる所に宗教の徹底性が認められねばならない。然も此の絶對無に歸着せしめられての起死回生に依つて行ぜられる實踐は、其の内面に關しては天地の差を示すが、結果に於ては對象化的道德の命する所と變りはないかも知れない。善は依然として善であり、惡は依然として惡であらう。然し絶對無に活

かされた非對象化的徹底が初めて萬物の生命を視る見識を惠むのであつて、絶對愛に依る實踐が單なる道德的自己完成愛とは内容を異にすることも確認されねばならない。純粹なる非對象化的態度としての宗教にあつては、救はれるか救はれないかが問題であるのではなく、安心立命が目的であるものでもない。一切の功利は徹底的懺悔に依つて潰滅せしめられてゆく。故に一念往生か多念往生かの問題も非對象化的現實にあつては明かに解決されてゐる。親鸞も云ふ如く「一念多念のあらそひをなす人は異學別解^{ベテグ}の人」に過ぎない。一念の中に多念があり、多念の中に一念があらねばならない。眞の無限は有限を包み、眞の絶對は相對に即する。一瞬一瞬が永遠であり、永遠が一瞬である所に非對象化的世界の眞相が認められねばならない。天國は劍の影にあるとマホメットは云つた。

一切の形式的束縛を破碎せしむれば止まない近代人的思维も自然法則や社會法則の形式を認めざるを得なくなつて自縛自縛に陥つた。そこで更に生の獨創性に避難所を求めたが形式なき形式は常に生から離れることが出来ない。文化は客觀的財としてそれ自身の論理 (Eigenlogik) を持ち之を作る人間を束縛する。人間は自ら作つた文化や制度と闘はねばならない。而も更に束縛する文化を敢えて自ら作らざるを得ない。此處に文化の悲劇的性格がある。宗教に於てさへも神秘說的傾向は一切の儀禮的形式を捨てて所に個人の宗教的自由を確保せんとする。「聖者が飲食するときに神の意に叶ふことは、聖者が祈り讃歌を唱へるときと同様である」とアンゲルス・ジレジウスは云つた。^(四) 一切の形式を打破することは宗教的現實に於て初めて可能である。何となれば其處に於ては一切の生的肯定は棄て去られるが故である。對象化的論理を以て進む近代文化も亦非對象化的論理を自覺することに依つて初めて形式との葛藤から超脱し得るであらう。Iren ist menschlich. (迷ふことは人間的である) であるからとて、過誤を犯した人が此の理を以て自己辯解をなすことは非對象化的論理を知らざる者である。迷ふことは人間的なるが故に、愈々以て過誤を犯さぬやうに精進してゆく所に非對象化的論理が活き人間の現實が示される。^(一五) (昭和・二五・一・一九)

註

- (一) ロマ書、第七章、第十九節「われ願ふ所の善は之を行はず、反つて願はざる所の惡は之を行へり」。
- (二) ロマ書、第七章、第二十四節。
- (三) 傳習錄卷上(岩・文版第二十六章)「知者行之始、行者知之成、聖学只一箇功夫、知行不_レ可_二三分作_二兩事_一」。
- (四) 傳習錄卷上(岩・文版第三十九章)
- (五) ガラテア書、第二章、第二十節「我キリストと_{トモ}偕に十字架に_{ツケ}釘られたり、既われ_{モハ}生るに非ず、ギリスト我に_{アイ}在て_イ生るなり、今われ肉体に在て生るは我を變して我が爲に己を捨_{スナ}し者すなはち神の子を信ずるに_{ヨリ}由て生るなり」。
- (六) Hegel, Die Philosophie der Weltgeschichte. Lessons Ausgabe I. Bd. S. 63
- (七) ドストイェフスキー作「カラマゾフの兄弟」(岩・文版米川訳)第二卷、五十七頁、七十二—七十三頁参照。
- (八) 禪宗無門関。
- (九) Augustinus, Bekenntnisse (Reclam-Ausgabe, übersetzt von Iachmann) S. 28ff.
- (一〇) Oscar Wild, De profundis に於ける「罪は憎むべきである。併し悔ひ改められたる罪程世に美しきものはない」といふ如き考へ方。
- (一一) 親鸞、一念多念證文「一念といふは信心をうるとききはまりをあらはすことばなり」。
- (一二) Himmel, Der Konflikt der modernen Kultur.
- (一三) Himmel, Der Begriff und die Tragödie der Kultur.
- (一四) Angelus Silesius, Cherubinischer Wandersmann
- (一五) 同様に、惡人正機なるが故に惡を犯すも差支ないと做すやうな態度は、人間的現實としての非対象化の論理を知らざるも甚しいものである。惡人正機なるが故にこそ、益々惡を排せざるを得ない心に、惡人正機の理に対する眞の受け取り方が存すべきことは續言を要しないであらう。